



## Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.35

英語担当 Mさん

### ◆なぜ医療通訳者になった？

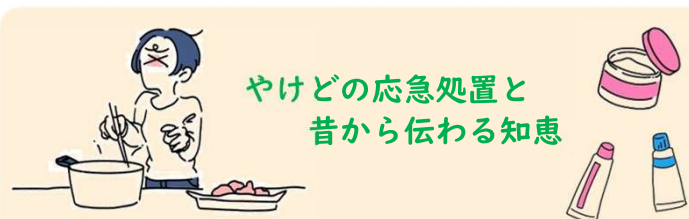
同業の通訳者から医療通訳を勧められたことがきっかけです。その方から「社会貢献につながる仕事がしたい」と思い、医療通訳を続けている」という話を聞き、その言葉が強く心に残りました。医療分野は学ぶべきことが多く簡単ではありませんが、自分の語学力や通訳スキルを通じて誰かのお役に立てることに魅力を感じ、挑戦することを決めました。

### ◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

医療通訳を始めてもうすぐ一年になろうとしています。今でも毎回緊張します。そのため、無事に通訳を終え、患者さんと医療者のコミュニケーションをお手伝いできたと実感できた時はとても嬉しく感じます。言葉だけでなく、文化や医療慣習の違いによって生じる戸惑いが少しでも和らぎ、「伝わった」「理解できた」と感じていただけた瞬間に、この仕事のやりがいを感じています。

### ◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

正確に伝えることはもちろんですが、患者さんにも分かりやすく伝えることを大切にしています。医療には専門用語が多いため、必要に応じて理解しやすい表現に言い換える工夫もしています。また、案件終了後には必ず振り返りを行い、不足していた知識や表現を確認するようにしています。毎月の勉強会や仲間との情報交換にも支えられながら、より良い通訳ができるよう学び続けています。



### やけどの応急処置と昔から伝わる知恵

唐揚げが大好きな子どものため、誕生日のお祝いに苦手な揚げ物に挑戦した通訳士に悲劇が！揚げ物の油が顔に飛んできて、やけどしてしまいました。すぐに冷やしたものの、あいにく休日で皮膚科はお休み…。手元にあったゲンタシン軟膏を塗りました。しかし後で調べると、「軽いやけどをしたら、まずは流水で十分に冷やし、ワセリンで保湿するのが基本」とのこと。

やけどの応急処置は、流水で冷やすことが基本ですが、韓国では味噌を塗るなど、昔は家庭療法としてさまざまな方法が用いられていたようです。アルゼンチン出身の通訳士は、幼い頃母親から「何にでも効く」と言われていた「万金膏」をやけどした時に塗って強い痛みが走り、かえってひどい目にあはめに…。一方、ペルー出身の通訳士は、祖母が生卵を当ててくれた思い出があるそうです。こうした民間療法は当時の知恵であり、現在の医学的な応急処置とは異なります。また、薬や軟膏は種類が多く、国によっても商品名や呼び方が異なるため、医療通訳の現場でも説明が難しいこともあります。正しい知識を持ち、適切な対応をすることの大切さを改めて実感しました。



### 今月のトピックス

### 「うどんは食べても大丈夫？」 食文化の違いと医療通訳

医療通訳を担当していると、時々ベジタリアンやヴィーガンの患者さんに会うことがあります。普段は特に食事制限のない生活を送っていますが、子どもの健康を考え、菜食についても関心を持つようになりました。インドではヒンドゥー教やジャイナ教などの宗教的・文化的背景から菜食を実践する人が多く、世界でもベジタリアンの割合が高い国の一つとして知られています。

近年はインド料理やネパール料理の店も増え、カレーやナン、ビリヤニなど現地の食文化に触れる機会が多くなりました。

食文化の違いから、日本で診察を受けられる患者さんが戸惑いを感じられることもあります。例えば、日本では胃腸の調子が悪いときに「消化の良いうどんを食べてください」と説明されることがあります。ところが韓国では、消化の良い食事といえばおかゆが一般的で、小麦粉を使ったパンや麺類は避けるように言われることが少なくありません。そのため、韓国人の患者さんは自分の症状が正しく伝わっているのか不安になり、「麺を食べても本当に大丈夫ですか？」と繰り返し確認されたりします。このような場面では、日本の食文化や医療上の考え方について、他国との違いを丁寧に説明する必要があります。医療通訳士にとって、医療知識に加え、患者さんの出身国の食文化への理解も、医療現場での橋渡しを務める上で重要なのです。

